

表面と断片の饗宴

ディケンズのフェティシズム

松本 靖彦

ヴィクトリアン・フェティシズムと題したシンポジウムの序章にあたる本発表では Dickens の塵芥に注目する。作品中で塵芥や mess（使い勝手のよい日本語が見当たらないので、この語を英語のまま使用する）がどれだけ、どのように片付けられていくのか、いわばその掃除、片付けの様子を吟味し、そこから新たに分かることがないかどうか探りたい。

Dickens 作品に限らず、19 世紀の絵画と小説にみられる塵芥の表現とその意味については、既に Trotter がヨーロッパ及び大西洋を横断する考察を行っており、本発表もそこから重要な示唆を得ているので、最初にその点に触れる。まず彼が自らの議論のために丁寧に仕分けしている waste と mess の違いを確認したい。waste と mess とは中身が違うわけではなく、塵芥を見る視点とその背景にある価値観の違いである。waste というのはある社会の包括的な価値体系、システムに照らし合わされた際に、有用性や価値がないとみなされたものを指す。一方 mess はシステムや因果関係に回収され切らない散らかりや汚れを指す。ただ、Trotter は例えば誰が意図したわけでもないのに服に泥が跳ねて汚れてしまったというような偶々生じた mess の考察が主眼であり、彼は既存の秩序や序列（またそれらを前提にした物語）から逸脱する mess の偶発性の内に、政治的平等への重要な端緒をも看取している。しかし、本発表で Dickens 作品から取り上げる mess は、必ずしも偶然性に焦点をあててはならず、人間の意図が関与したものをも含むことを付言しておく。

もう一点 Trotter が行った重要な指摘をみておきたい。彼は 19 世紀の絵画と小説において、散らかった状態（mess）への関心が美学的態度として確立して行った結果、1860 年代になって、この mess が具体的な表現として個々の作品中に顕著に見られるようになったと述べる。この傾向の 1 つの背景として、彼は決定論的世界観が衰退したことを指摘しているが、画家や作家たちが軒並み意識的に mess を描くようになったのがなぜ 1860 年代だったのか、明確な回答は提示していない。

ただ、確かに塵芥あるいは塵芥処理描写の点で、1860 年以降の Dickens 作品にはそれぞれ特筆すべき点があり、Trotter の指摘は妥当だと思われる。本発表でも 1860 年から 70 年までの Dickens の主要小説、即ち *Great Expectations*、*Our Mutual Friend*、そして *The Mystery of Edwin Drood* に焦点をあて、塵芥ならびに mess がどのように片付けられているか（あるいはいないのか）その掃除や片付けの様態を見ていきたい。

まず掃除、片付けの観点から *Great Expectations* (1861) を見た時、最も重要な塵芥は、私見では Miss Havisham の部屋にみられる mess である。この散らかりは円満な形で綺麗に掃除される様子が示されていない。第 49 章で Pip に対する自らの仕打ちを悔い、悶々としていた様子の Miss Havisham に暖炉の炎が燃え移り、彼女は大火傷を負う。その際、彼女の屋敷の mess の一部も焼ける。一命はとりとめたものの、彼女はそれが元で床に伏し、やがて亡くなる。危うく「汚部屋」ごと焼却処理をされそうになったわけである。事実関係からすれば、不慮の事故が原因で亡くなったわけだが、Moynahan のように深読みをすれば、これは自分を騙し続けた Miss Havisham に対する Pip による無意識の復讐であり、焼き討ちだったのだという見方もあり得る。いずれにしても、彼女の死後、Satis House と呼ばれた屋敷も打ち壊されるので、当然、塵芥だめのような彼女の部屋もなくなりはずだが、彼女が抱え込んでいた悔恨や自責の念同様、mess は読者から見えないところに放置されたまま、忘れ去られている。

それに対して *Our Mutual Friend* (1865) は、Trotter の議論でいう waste の発想を体現した一大塵芥処理小説といってもよい作品である。物語の中心にある塵芥の山が少しずつ篩にかけられ、再利用可能なものと捨てられるしかないものとに分別され、最終的にはすべて完全に処理される。登場人物たちも塵芥同様、それぞれの試練を通じて真価を試され、再利用できない塵芥、つまり更生不可能なくらい悪に染まっているとみなされた人間は廃棄される。これまでも Dickens 作品において、勧善懲悪の原理から悪役の人物が処刑されたり、追放されたりすることはあったが、悪の排除という倫理的行為が、塵芥捨てという衛生上の行為と意図的に重ね合わされていることは、本作品の特筆すべき点である。

この作品の中心には、塵芥を徹底的に取り除こうとする潔癖さ、几帳面さがあるが、それが呪われた塵芥山——だからこそ世界の浄化のために取り除かれねばならない（植木 314）——と直接関係ないはずの Venus 氏の店のような場所にも影響を及ぼしているのは気になることである。作品内の几帳面さや綺麗好きを単純に著者 Dickens の性向やヴィクトリア朝イングランドで進行していた社会的な大掃除（clearing）に丸ごと還元することは避けたいが、彼が 1860 年代のロンドン・エンバンクメント事業の進展に快哉を叫んでいたことは記憶しておいてよい（Collins 537）。根が綺麗好きだからこそ、彼特有の「嫌悪の魅力（attraction of repulsion）」が発動して、個人や

社会の汚れや塵芥に尚更強く惹きつけられたとも考えられるからだ (Collins 540)。

1865年完結の *Our Mutual Friend* が、隅々にまで掃除が行き届いていく世界を描いているのを見てしまうと、その後の Dickens がどのような世界を描いたのか気になる。そこで、彼の未完の遺作 *The Mystery of Edwin Drood* (1870) では、どんな掃除や片付けが行われているのか見てみたい。果たして前作 *Our Mutual Friend* に見られた綺麗好きの傾向には更に拍車がかかるのだろうか。

The Mystery of Edwin Drood では、Dickens が書き終えていた部分を見る限り *Our Mutual Friend* のように掃除が行き届いていくのではなく、messy な世界と清潔な空間との棲み分けが行われている。その中で、どうしても片付けられなければならない塵芥、解消されなければならない mess は、明らかに主人公の Jasper であり、小説が完成していたとすれば、Tartar や Crisparkle 等、秩序や整理整頓を志向する「清潔組」の登場人物たちが、気味の悪い mess である Jasper を追い詰めて行く展開になったに違いない。

作品が完結していないため確定的なことは言えないが、最後に Dickens が生前執筆した最後の部分から 2 つの場面を見て、そこからどのような世界との向き合い方が読み取れるか——そして推奨され得るのか——という点について 1 つの可能性を提示し、本発表を締めくくりたい。

1 つ目は時折ロンドンを襲う ‘gritty stages’ を描いた場面である。第 22 章で Rosa も ‘Cannot people get through life without gritty stages, I wonder?’ と嘆いている (254)。目や鼻、口にまで入ってくるに違いない砂埃は不快には違いないが、全ての人に等しく襲いかかる避けようのない境遇であり、Trotter の言う mess に近い現象である。この ‘gritty stages’ は人間の努力で到底片付けることができるものではなく、「また来たか」と溜息を吐きつつ、いわば都市環境の表皮が剥離したものとして甘受するしかないものである。

もう 1 つは第 23 章の終わり近く、物語の舞台であるクロイスタラム (ロチェスターをモデルにした架空の町) の情景を描写した次のような文章である。

A brilliant morning shines on the old city. Its antiquities and ruins are surpassingly beautiful, with a lusty ivy gleaming in the sun, and the rich trees waving in the balmy air. Changes of glorious light from moving boughs, songs of birds, scents from gardens, woods, and fields . . . penetrate into the Cathedral, subdue its earthy odour, and preach the Resurrection and the Life. The cold stone tombs of centuries ago grow warm; and flecks of brightness dart into the sternest marble corners of the building, fluttering there like wings. (Dickens, *Edwin Drood* 277)

死の前日に書かれたこの一文に死後の復活への言及があるにしても、また、これが生命が躍動する美しい初夏の光景を描いているにしても、そこに特別に決定的な意味を読み込むことは避けたい。なぜなら、この小説はここで終わるはずではなかったわけだし、Dickens は自分の人生にはまだ続きがあると思っていたに違いないからだ。彼は死の直前、実際にこのような情景を五感を通して全身で味わったのかもしれない。あるいは、このように美しい庭のようなイングランドの風景を想像して愛おしんだのかもしれない。いずれにしても、この情景も ‘gritty stages’ と同様、到達点でも永遠のものでもなく、到来しては去っていく段階 (stages) の 1 つであり、めぐりめぐる季節のひとつまなのである。自然が見せる様々な表情にも、時に都市の表皮が剥離して人を悩ませることがあるにしても、そこに特に運命的な意味を読み取ろうとせず、あえて表面を / 表面で味わう。テキストには、そんなアプローチをすることで初めて、そこにヴィクトリア朝ロンドンの空気の肌触りだとか、Dickens 最晩年の身体感覚だとかにアクセスできる回路が開かれるように思われる。これも 1 つのヴィクトリアン・フェティシズムと呼べるのではないだろうか。

参考文献

- Collins, Philip. ‘Dickens and London.’ *The Victorian City: Images and Realities*. Ed. H. J. Dyos and Michael Wolff. 2 vols. Routledge/Kegan, 1973. 2: 537-57.
- Dickens, Charles. *Great Expectations* (1861). 1953. London: Oxford UP, 1975.
- . *The Mystery of Edwin Drood*. (1870). 1956. London: Oxford UP, 1978.
- . *Our Mutual Friend* (1865). 1952. Oxford UP, 1974.
- Moynahan, Julian. ‘The Hero’s Guilt: The Case of *Great Expectations*.’ *Essays in Criticism*, vol. 10, no. 1, Jan. 1960, pp. 60-79.
- Taylor, Jesse Oak. *The Sky of Our Manufacture: The London Fog in British Fiction from Dickens to Woolf*. U of Virginia P, 2016.
- Trotter, David. *Cooking with Mud: The Idea of Mess in Nineteenth-Century Art and Fiction*. Oxford UP, 2000.
- 植木研介『チャールズ・ディケンズ研究—ジャーナリストとして、小説家として』南雲堂, 2004年.
- 小池滋『チャールズ・ディケンズ』沖積舎, 1993年.